

【記憶改竄】

非情なマフィアの甘い罠

宿敵を愛

するよう

認識

を塗り潰された

潜入捜査官の無残な

快樂墮ち



【記憶改竄】非情なマフィアの甘い罠。宿敵を愛するよう認識を塗り潰された、潜入捜査官の無残な快樂堕ち

つばある。

一章 潜入捜査失敗、ボスの正体

辞令が言い渡されたのは二年前。

私の仕事はいつも突然辞令を言い渡される。

今回の任務は、簡単に言うところ、潜入調査だ。私は自分の身分を偽り、今までの人生の全ての痕跡が辿れないように消し、指定された人物像になりきって潜入する。つまり仕事もプライベートも常に自分を律し、その人物にならないといけない任務だ。

私の潜入捜査先は、最近かなり手を焼いている、この国最大と言われているマフィア組織。

私の任務は、大きくわけて二つ。

一つは、この組織が作ったとされる新薬、実態はよくわからない。出来れば新薬そのもの、もしくはレシピを手に入れること。

もう一つは、マフィア組織としての実態把握。特にボスについて確認すること。出来れば重要な情報を簡単に手に入れられる地位になることだった。このマフィア組織は大きいのにボスの情報と実態が未だに掴めない。今までは全て男性捜査員が潜入調査をしてきたがことごとく失敗をしていた。

失敗、それはつまり死だ。

なので、今回は何度か潜入捜査の実績がある私が選ばれた。男性捜査員で掴めないなら女である私が潜入し、ボスの恋人になることを目的として送り込まれた。

確かに幹部になるよりも簡単に情報が手に入りボスの女ということでは疑いの目を向けられることは少なくなる。潜入任務としてはかなりの難易度だけれど、私はその任務を受けた。ボスに気に入られるかどうかはわからないし、最初のファミリー入りでしくじる可能性もあった。

私にも恋人がいた。仕事の同僚なのでいつも私の仕事を理解して、サポートしてくれる彼、亮介が私は大好きだったけれど、私は亮介と別れる覚悟を決めて亮介に会いに行つた。いつどうなるかわからない任務だし、私は任務開始から別人として生きることが決まっている。亮介には会えなくなるし、会つたとしても他人を装わなくてわならない。なので潜入捜査前に亮介に会い別れを告げると亮介は

「結婚しよう。ずっと待っているから無事で帰ってきて」

亮介に抱きしめられ、頬に手を添えられ優しくキスされた。私は、亮介との結婚だけを心の支えに過酷な任務へと赴いた。

常に、細心の注意を払い、自分を殺し任務をこなす。まずは、ファミリーにうまく入り込み潜入をする。

私は上手く潜入し、二年で幹部候補までになった。女性で幹部になれるのは稀なことらしい。

けれど私はうまく潜入出来ていたはずなのに、新しい幹部を指名れるパーティ会場での一つミスで、正体がバレてしまった。そう、「今日はボスは来るのか？」という一言だった。他の幹部にはボスは来ないと通達があ

つたのに私にはなかった。

当然、周りは全て敵だ。その場で殺されてもおかしくはなかったのだけど、その場で取り押さえられ、女であるから生かされた。

この組織で女であることはかなり重要だった。麻薬で資金稼ぎを良しとしない組織だからこそ、女は価値が高い。裏切ればマフィアの構成員たちに散々遊ばれてあとは資金稼ぎの娼婦として娼館に沈めればいいのだから。

この先の展開はきつと、情報を引き出すために罠られて殺されるか、それとも組織の資金稼ぎとして娼婦として売り飛ばされるかの二択だろう。

私は、取り押さえられてそのまま目隠しをされ腕を後ろに回され拘束され、頭に布を被せられ、引きずられる

ように車に乗せられ、その後も何度か車を乗り換えさせられた。両脇に男性二人、脇腹にはずっと冷たい金属の感触がしていた。銃口を突きつけられていることを感じる。



何度かの乗り換えで、車が止まり私はそのまま、体を強く引つ張られて車から下ろされた。背中に銃口を突きつけられながら

「歩け」

前が見えず足がもつれながら言われた通りに歩いて行く。音で何処かの扉が開いたりことがわかった。そのま

ま身体を引つ張られ、そのまま椅子に座らされて腕の拘束と椅子を固定され、顔に被せられた袋と目隠しを外された。私は座り心地の悪いパイプ椅子に座らされ、拘束された手をガチャガチャと言わせてどうなっているか確認する。パイプ椅子と手錠が繋がれていて自由を奪われている。小さな部屋の一室に大きなモニターと、私の横にはラフなオールバック風ショート銀髪に鋭いアイスブルーの瞳、黒縁メガネをし、黒のドレスシャツにホルスターをつけている男が立っていた。ボスと並んでも引けを取らない長身に見た目が目立つ彼を何処かで私は見たことがある。ボスの腹心のセスがいた。

私は取り押さえられ、拘束されるまで暴れて抵抗したため服がかなり肌けてぐちゃぐちゃになっていた。

部屋に武器になる様な物、相手から武器が奪えないか考えるが、大きなモニター以外に物がこの部屋にない。また、セスは一見インテリに見えるが、ボスの腹心だけあつてフィジカルがかなり強い。セスから武器を奪うのは拘束された身では無理がある。いつの間にか私を連れてきた奴らはいなかった。

プツンという音と共にモニターに映像が映し出された。白いスリーピースのスーツを着て金髪にアメジストの様な深い紫色の瞳。顔が整った男性が優雅に革張りの一人がけのソファに座っている姿が映し出された。彼はソファの横にあるサイドテーブルにあるワイングラスにワインを注いで

「俺の寝ぐらに子猫が潜り込んで来ていたようだな」

画面の中の彼がそう声をかけてきた瞬間に私が座っている隣に立っていたセスが後ろから私のおっぱいを揉んできた。服の上からだけど少しの刺激に驚いて

「なっ、なに？ えっ？」

困惑と疑問の声をあげていると服の上からぎゅつと乳首を探り当てられて摘まれてびくんつと腰が跳ねた。

「俺が見ているというのに他の男に触れられて気持ち良くなってるのか？」

銃口を突きつけられた瞬間から刪られることは覚悟していたけれど、これは予想外すぎた。セスは手を止めることはしなかった。私のおっぱいをまさぐり、揉まれ、巧みに緩く快楽を与えられている。

「あなたはっ！」

彼はにやにやと笑いながら、ゆつくりとワインを口に含みゴクリと飲み干した。

「久しぶりだな。お前が裏切り者の子猫ちゃんだったとはな。お前に俺の正体を掴むことは最後までできなかったようだな。俺はこの組織のボス、マレクだ」

ボスは男だということ、幹部の中でも限られたごく少数の人しかボスの顔は知らないことも周知の事実だったけど、これは予想外だった。私は彼のことを知っている。彼は、この組織の幹部だ。ボス直属の命令を良く持つて来たり、とにかくボスがかなり信頼を置いている幹部だということはこの組織の中では皆が知っていることだった。よくよく考えれば幹部を装って組織内部の情報や、私みたいな裏切り者を炙り出すには幹部を演じていた方

がマレクにとってとても都合がいいことしかない。彼自身が組織の情報通だし、冷酷な仕事も受け負っていることを考えれば疑うことなんてなかった。そんなマレクがこの組織のボスだったということ。これは、警察関係者が手を焼くわけだ。

マレクは、警察内部にもかなり顔が効く。組織の内情や犯罪の証拠がないことを優雅にやって来て説明するというのが警察内での周知の事実だ。マレクは

「わざわざボスがくる必要なんてないだろう？」

不敵に笑いながら警察の取り調べをうけ優雅に帰っていく、そんな男をボスなど露にも思わない。

そして、今、私のおっぱいを揉んでいるセスはボスの腹心だ。どんな仕事もボスの命令なら聞く男だ。良くマ

レクとも一緒にいることが多かった今考えればマレクがボスなら辻褃が合う。彼から発せられる言葉や言動は全てボスからの直通命令だと。いつも通達があった。セスは長身だから伝言役としてもうってつけだろう。

「さて、俺の寝ぐらに、のこのこと迷い込んだ裏切り者の子猫ちゃん。俺はな、お前を俺の情婦にするか本気で考えてたけどな、警察関係者だったとわかってからどうしてやろうかと毎日そのことだけ考えてた」

私は着ていたスーツのシャツをセスに破られビリッという音と共にボタンが弾け飛んだ。そこからおっぱいがぶるんと飛び出し、レースをふんだんに使った黒いブラがまろびでた。マレクはヒューっと口笛を吹いた。

私はその口笛で恥ずかしさと女であることを認識させ

られる。顔が熱くなっているとセスが私の顔に香水のよ
うな物を吹きかけた。私は驚いて思わず顔を背けると髪
を引つ張られ、マレクが映るモニターに顔を向けさせら
れた。香水のような物を吹きかけられてからぼんやりと
少し頭が回ってないような気がする。今この緊張状態で
考えなくてもいいことを考えてしまう。ただただ、頑張
れば任務は達成出来ていたんだなあと思う。ボスを暴く
という任務については。そしてマレクがボスだと知って
しまったと同時に私の命はここで尽きてしまう可能性が
濃厚になってきたなと人ごとのように走馬灯のように頭
を巡っている。

この組織で絶対的に知ってはいけない情報を私は知っ
てしまったのだ。けれど、先ほどからマレクはとても楽

しそうに口角をあげて上機嫌でワイングラスを傾けワインを一口飲んでいた。

そんなに私の命を散らすのが楽しいのかと思ひ怒りでぎりぎりとした私の齒が鳴る。マレクはワインの色を確かめながら

「血の掟は、わかつているな？」

「ええ、わかつているわ」

血の掟とはマフィアにおける絶対的な掟。

掟を守れないものは行方不明になったり、惨い死体で発見されたり、仲間が手を汚すことになったりする掟である。私は曲がりなりにもマレクに忠誠を誓っているファミリ―の一員なので、その掟に背くことは許されない。裏切り者には死をとという忠誠だ。最初から裏切り者であ

る私は忠誠誓つていてもバレてしまえば掟に従い死しか残されていない。マレクはグラスに入つたワインに光を当てながらグラス越しに私を見て

「俺からの提案に乗るなら身の振り方を考えてやらなくもない」

マレクの言葉に耳を傾けているとセスが私の耳元で

「ボスからの伝言です」

セスは私のブラの中に手を入れ、ぎゅつと乳首を摘み上げ

「あつ……んっ……くっ……」

さつきよりも直接的な刺激に声が出る。恥ずかしさと顔見知りの男に痴態を晒したという羞恥心で頬にずっと熱が集まっているのがわかる。セスは涼しい顔で眼鏡を

指でくいつとあげ、私の痴態などなかったかのように囁いた。

「1.組織の男どもに弄ばれて、惨たらしく殺される」

「2.このまま薬漬けにされて、娼館に沈められる」

二つの提案は私が予想していたものだっただけけれど、

「3.ボスの女になる」

……耳を疑った。ボスの女？ この国最恐最悪のマフィアのボスの女？　ぐるぐると考えているとモニターに映る彼と目があう。その紫の瞳の煌めきに身体が勝手にぶるりと震える。

「俺が直々にお前を俺の女になる権利を与えてやると言ってる。俺の完全なる庇護下ならこの国で一番安全な場所だと思わないか？」

私の選択肢はマレクの女しかなかった。頭の中で警告音が聞こえるが三番目の選択をするしかないと思つてゐる。マレク一人の慰み者になるのか、それともマレクのおもちゃか……。どっちも最悪だ。それは、結婚の約束をした亮介の元に帰れないことを意味している。けれど、他の二つの選択肢よりは望みがある。さつきから表情を変えないセスに乳首をいじられていて、思考回路がうまく回らない。少ない刺激を身体がピクンと掬い取つてくる。マレクの女というたつた一つの希望に負けそうになる。この希望に縋つたところで私が救出されることはない。潜入調査とはそういうものだ。失敗Ⅱ死。そういう世界だ。

私が返答しないでいると、セスが急に私の顎を掴みセ

スの方を向かされ鼻を摘み口づけをされる。セスの咥内には、液体が入っておりそれを流し込まれ、飲みこむまで抵抗出来ない様に頭を固定され、息苦しくなっていく。私の喉がぐくりと鳴ったのを確認して、セスが私の口の中をくまなく調べる。毒を仕込んでないかと、舌を噛み切る雰囲気がないかを確認している。

やばい……何を飲まされたかわからないけど、意識がふわふわとする。音はかなり拾えるが……。セスが口の中に指を入れて調べてる時は背中がぞくぞくとする感覚がする。これは何か良くない薬物だ。

背中がぞくぞくする、意識がふわふわする感覚に加えて、服が肌に触れる感覚でさつきままでと比べものにならないくらい体がだんだんと熱くなってきた。

これは、私が潜入捜査で調べなくてはいけなかったマレクが密かに作っていた新薬だろう。この快楽は麻薬に変わるほどの新薬かもしれないと思いながら、何を飲ませたんだとモニターに映るボス・マレクを睨め付ける。

「最近の開発した新薬の媚薬だ。さつきお前の顔にかけたのも薄めた新薬の媚薬だ。飲ませたのはこの新薬の媚薬の原液だけだな。この媚薬がお前が喉から手が出るほど欲しかったレシピだっただろ？ 依存性がなく、効き目は抜群。娼館で使おうと思つてな。薬に依存性がなくてもセックスは病みつきになるという優れものだ。とは言つても、お前には効き目は薄いみたいだけだな」

マレクは私の様子を伺つてそう言う。身体が熱くなり、頭に靄がかかったようになり、股がムズムズとする。こ

の効果で効き目が薄いとなると一般人は発狂してしまうのではないかと思う。私自身の耐性のおかげか、それとも訓練の賜物か？ どちらかはわからないけど私の今の状態は異常だ。頭の中で警報音が聞こえる。このままだとまずいと。

モニターに映るマレクはワインを注ぎ

「さあ、楽しもう。今宵は俺の寝ぐらにやってきた子猫に乾杯だ」

また上機嫌にワインを優雅に口に含んでいた。そのマレクの言葉を皮切りにセスが私のブラの中に手を入れて弄っていた乳首を引っ張っておっぱいがぶるんっ空気に晒された。痛みを感じるくらい引っ張られたはずなのにそれも快感に思えてしまう。空気に晒された感覚すら過

敏に快樂を拾う。マレクは私のおっぱいが見えた瞬間目を細めにやりと笑っていた。

「なかなかじゃないか」

乳首をくにくにと握られ、股がむずむずと疼き始める。膝を擦り合わせて、その感覚に耐える

「んっ……」

モニターに映し出されるマレクを見ている。その視線に身体が震える。乳首を摘まれくりくりと触られて

「ひっ……んっ……んんっ……」

媚薬の所為で声の我慢が効かない。くそっ、あんなやつにこんな痴態絶対に見せたくないのに。下唇を噛み締めて耐えるけれど、気持ちよくなつてしまい、声が漏れるのに抗えない。

そのままするするとセスの手が下へと伸びていった。足を広げられるとスーツのスカートが捲れていき、ショーツが露わになる。モニター越しなのにマレクと瞳がち合うとたん身体が熱くなる。あの瞳に見つめられると自分が獲物になったような感覚になる。ブラとお揃いのショーツが露わになり、抵抗しようと足掻くとセスが私のショーツをぎゅつと上に引っ張って、中身が見えそうになりながら刺激に

「いやっ……見えちゃう……やだぁ……」

涙声になりながら、顔が真っ赤になるのがわかる。じたばたと脚を動かし抵抗すると、ガタガタと椅子が鳴るだけで虚しい音だけが響いた。

「いいのか？　あまり抵抗すると俺の女ってことも考え

直さないといけないだろうなあ？」

モニター越しにいやらしく笑っているマレクをキツと睨みつけていると、マレクはセスに目配せをし、セスはいとも簡単に私の抵抗を押さえ込み、口に指を入れられ、指で舌を捕まえられ舌を引き出され、だらしなく口が開く。

そこへもう一度媚薬を口へと注ぎ込まれる、セスに唇を奪われて、口の中を掻き乱すように舌が這い回り息ができないほど苦しくなり顔を背けようとして、頭を抑えられ、ごくんと飲み干し、絡められた舌から逃れようとした瞬間唇を押しつけられ、舌を思いきつきり吸われた。幾分か液体が鼻に入ってごほごほと咳き込んでいる間にショーツを剥ぎ取られ、セスがモニターによく見えるよ

うに股を開かせる。マレクの視線の前でおまんこを披露する羽目になり、

「ちよっ、やつ！ やだ！」

脚を閉じようと抵抗するが、セスの手がするりと股の間に滑り込ませてぐぐぐつと開かされる。

「いやつつ、絶対にいやつ！」

「抵抗せず、ボスに全てを曝け出して下さい」

セスに耳元で囁かれた。

セスは内腿をさわさわと撫でる。それだけで身体がびくつ、びくつと跳ねる。

声が出てしまいそうで、下唇を噛み必死で耐える。モニターを見るとにやにやとしているマレクの顔が見える。ぐつとマレクを睨みつけるが、マレクは楽しそうにして

いるだけだった。

内腿を触っていた手がするりと股の間に手が触れる。

「やつ！……やだ！」

「もう、抵抗しないのか？　つまらねえな」

「誰がつ！　んっあっ……」

マレクは私の反応をみてくつくつと喉を鳴らして笑っていた。

「その抵抗いつまで続くかな？」

マレクの態度と言葉に私は怒りで媚薬に犯された思考を取り戻しながらも身体は言うことを効かない。必死に抵抗を試みるけど媚薬は私の思考と身体を奪っていく

「赤く熟れて、触って欲しくてたまらないと主張してい

るクリトリスを触つてやれ」

かあーつと顔が熱くなる。モニター越しでもわたしの痴態が見えてるということ、自分じやどうにもならない身体の反応に

セスはマレクの指示通りに私のクリトリスに指が優しくちょんつと触れた。

「いやっ、いやあつ、やあつ、やだあ……やあつん……

」
軽く触れられるだけだったのに気持ちよくて声が抑えられず、抵抗しようとするとうる腰がびくんと跳ねる。

「ひやつ……やあ……だめっ、やだあやだあ……」

だんだんと指の動きが速くなり、クリトリスの上でくちゆくちくと指を動かされるたび、脳が蕩けそうなほど

気持ち良い。抵抗虚しく気持ち良さに負けてしまう。

モニターに映るマレクと目が合い、マレクはにやりと笑う

「恥ずかしいな、俺の前で雌としての自分を曝け出して、クリ触られただけで、まんこぐちゃぐちゃに濡らして。気持ちいいんだろ？ ほら、見ててやるから無様に俺の前でイけ」

「んっ……誰がつ！……あっ、あんっ……やあっ……だめっ♡」

セスに絶頂と同時に耳をカプツと甘く噛まれ、セスの指遣いに翻弄され、気持ちよくて声を抑えられないし何より、イってしまった「お前は俺の女になる選択しかない」

マレクはワインを口に含み、ニヤリと笑っていた。くつ、媚薬と絶頂で頭が上手く回らない。私のささやかな抵抗は、ただただ、マレクを睨め付けることだけだった。「はあつ……はあつ……んっうぐう」

荒い呼吸を繰り返していると、口に布を当てられ薬品を嗅がされセスに耳元で

「次に目覚めたら、ボスの女ですよ」

その言葉を最後に私はゆっくりと意識を手放した。

続きは本編をお楽しみ下さい

奥付

作品名…【記憶改竄】非情なマフィアの甘い罠。宿敵を愛するよう認識を塗り潰された、潜入捜査官の無残な快樂堕ち

著者名…つばある。

イラスト…湯朝はいね様

発行日.. 2026年4月28日（第一刷）

連絡先.. <https://www.pixiv.net/users/23830593>